



詠歌
覺悟
附分冊

伊地知文庫
文庫20
326



一 勅撰の四万葉集に上代集の初奇の洞室の美葉の内
のしとまやま記河を今とれ用ひて詠を録し古来風解
出する而も奇の内を多用せり古来風解の美葉のやまを
えり出さる



伊地知

我せにまを抄ひてしを風みやをををいふつとれあ
ぬしの奇乃類とるる古来風解五冊信本々々也

一 古今を奇に上代集のしを風みやをををいふつとれあ
三代集をををの飛躍とるるしを風解とるるしを風解とるる
を信成の載集を撰給ふとき風解をよむるしを新古今の
花とるるしをよむるしを新勅撰の美葉をよむるしを

古今にいつき終るゝ定あつと何もの古今をいふことと云ふ
續後撰の初心乃とりの入るゝ書也

千載集 新勅撰 續後撰

是を家集と云はれんは二條家と教三代宗通と云はれ
しと云ふ下古より續後撰と云はれんは中世と云ふ也何集は
十代集を流傳と云ふ也此集は集は世よりいれん流傳と云ふ
然れん十代集と云ふ人各別也

一 家集 初心乃とりの入るゝ 為家集 草菴集

内府公ハ烏丸
内大臣光業也

内府公ハ近代の集をいれんは比類と云ふこと
内府公ハ初心乃とりの入るゝ

一 内府公ハ勅撰をいれんは集一部と云ふことと云ふこと

勅撰の及ふことと云ふことと云ふこと
其れを解ふことと云ふことと云ふこと
度し意味と云ふことと云ふこと

勅撰 天竺の佛と云ふことと云ふこと

如はるやと云ふことと云ふこと

一 勅撰 内

志しと云ふことと云ふこと
神垣よはかといふことと云ふこと

花好あり 花ハ一本れをとりて 一木の花の色を

めつしとや活割育て 此らの顛倒ありきと信ん

一 分ハ十人より少くも 思ひて十人より 應これを
折しぬきく一子を出て やつし有し 文子孫子 懸る膽
ハ大なるを欲し 心ハ小なるを欲し 此れは 命の
丈夫先方を 拙すふ 宣家 家隆 小し 命を 一
これにて 命を 思ふ 命を 命を 命を 命を 命を 命を
ことは 命の 命の 命の 命の 命の 命の

一 亦ハ 餘情の有る 能ふ 能ふ 能ふ 能ふ 能ふ 能ふ
好もしい 初ん 初ん 初ん 初ん 初ん 初ん

余情有やりに 浄筆

一 天尔 抄集 一字 一字 心の 抄集 抄集 抄集 抄集 抄集

あふ 坊や 本は 信の 意を 信の 意を 信の 意を 信の 意を

一 此の 花の ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり

松の わり 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と

一 内府 曰 有 明 乃 氣 入 相 の 声 入 相 の 声 入 相 の 声 入 相 の 声

毎度 浄筆 浄筆

一 同き 世を 世を 世を 世を 世を 世を 世を 世を 世を 世を

初めの 時を 時を 時を 時を 時を 時を 時を 時を 時を 時を

題を 題を 題を 題を 題を 題を 題を 題を 題を 題を

一 月かき形しぬ思ひもんなきい美人あつていふ下流此がよも思せぬ
ぬきもふ下流おれ一 中井あとの類し

一 月きやうく云河舟も思ひもなきていふ下流

一 月紫の戸松の戸とて山家をもとくはるも初んごとの好てふ下
流山の下流谷の下流も流へ又流是と云く曉をこくす
斗も古奇あめいも好もい魚もい

一 月古半有河由緒有河好も流魚ももたも有かひにせ加半
を引もい先一ももまきもゆもねも流も一たもい

暮 秋風も初りかひもさゆもたもいもをいかけもきぬらん
後撰 秋風も初りかひもさゆもたもいもをいかけもきぬらん

一 名取のふかふかと耳迫き取を二流 花はし節 孫も就田

いへる大和
流さく名取の川もさく埋木も流もいれ陸奥もさへ又名取川
流の山丸といはれをいゆも又小倉山といへる山味もい
いへる大和

一 詩の心を流もものゆも奇もやもまきやうに二流古半有前
と日一

むし思ふ若れ流乃もれあもかひもなまも人か山ほもい

庐山雨夜草庵中の心

思ふもた思ふもその春れ流の脱月ねもあもい

不明不暗 朧く月

一名新の身もむし富士の西子浦任吉は清政を清合と云ふ
る細く焼指と云ふ中をかけ合を平介と云ふ初人の石流
事

中や焼もむし乃長秋と云ふ川よやあむまのわけの

東海の家やまゆめ白川日ぬぬ秋うせうふく

一名新を伝して清も其大平

久き中川川のさし舟いさあうてやをゆん

こはく久保の中もまると里なれを幸奇と云ふ清かつこ

一名新は清つひらと云ふ清も其の家の名つ川

山陰よ〜〜〜云々類ひしたといは浦の家の名を清

福格よま〜〜〜もその所の古き家をらんて清も其

所の家の清

一名舟の衣の女の神は上古より松河は金を別の事か

とも南河よ〜〜〜 好河

かとかけを又やあしん白州乃神のつれの有明の月

この新よ清くあれは月々有明へよ白州は徳とてや

一川たうへる秀白智くもむへ〜〜〜 像成仁

新なる七つれと波の女のちのあま〜〜〜秋うけは清のま

こは〜〜〜よ〜〜〜秀白なり

如ばよむ時... 一説に

一女師を... 且菅原

春... 初... 一

一 後集... 内分

今... 川... 月... 乃... 上... 入...

月... 集... 後... 集... 一

除... 月... 集... 月... 集... 一

一 一... 天... 入... 一

年... 春... 一... 一... 一

五... 一... 一

一 一... 一... 一... 一

止... 一... 一

一 一... 一... 一

一 一... 一... 一

是... 松... 一... 一

風... 人... 一... 一

一 学の影、まほま念志、ふらにむまひり
一 冷泉、紫宸殿、劫後寺

ちりみくせし

合テニ式

按式ハ喜權式四病 所謂岸樹病 風爐病 浪船病 落花病
孫姫ハ八病 所謂同心病 乱思 爛蝶 清鴻 花橋
共楓 中絶 佳梅 演成式七病 所謂頭尾病 胸尾
勝尾 麗子 游風 舌額 遍身 今コニ増病
四病トモニ喜權式トスル者 拾芥抄ニ抄テ云ナラシレ今テ以
三匹尾ニ拾芥抄誤ル也

サ

伊勢

沖はぬあしのこまゆら 七条后かかれせむふる城このこ
ゆへへとも秋るし 涙のをれお井よて物言ふしおのをこ
けて秋のふきふとらんす 陽白をへてをのちりあしはとけむ

秋むとのけは花落し又らんす 物をほひらん 湯のえん初
うり又物をまねえんかまきつうつ七条湯よのかけきし居
のえんつよらん社この湯よを意んし けきの月日けしうの初

此奇短家のよおし

みつこ

此も奇短家のよおし ちりみくせし 初をより年のをまきく云つあ
く年をおまきくせし ちりみくせし 初をより年のをまきく云つあ
幾年あはれしつうし ちりみくせし 初をより年のをまきく云つあ
ちりみくせし 初をより年のをまきく云つあ
ちりみくせし 初をより年のをまきく云つあ

- 一 学の影々を信念志をくじりし
 - 一 冷泉 紫宸殿 劫後寺
- ちりみくせし

備後松尾
孫姫式喜
櫻式四病林
姫式八病原
式式七病

- 一 子標式八病四病 濱成式七病 合テニ式
 - 一 有げよ有明をなつてし
- カホノ反ケ 志りしらすすろ シカノ反サ

伊勢

沖はぬめぬめなる 七条后かかれし世にふるみ城なる云
 へへへと移るし 涙のをれぬ井より移るし ぬめをこ
 けて秋のふきよと人す 備白を入てをのちらぬく ひとけみ

おむとのいは花落し又人す。やをほゆらん 湯のえん初
 ろり又をまねえんかまわつて七条湯よのかけきし 居
 のえんつよは社にの湯をを意んし けきの日はけつての初
 此奇 寝方のよおし

みつこ

此も奇始 ぬまき續 ちりし 初をより年のをまきく云つぬ
 一年をおきしききし づかぬ 本懐を末白く人々
 幾年おきしききし づかぬ 奇に流るるもあい 流るるえんは
 ちりし づかぬ 奇に流るるもあい 流るるえんは
 づかぬ づかぬ づかぬ

花をんりや如雅 花をんりまを 日よ 春をん 不唐幾夕
春の暝 依事 春の柳が 日よ ぼろぼろ 日よ 花の白あ 不唐幾夕
花の香つく 日よ 春の香つく 日よ 春の香つく 日よ 花の白あ 不唐幾夕
春の暝 不唐幾夕 春の暝 不唐幾夕 春の暝 不唐幾夕 春の暝 不唐幾夕
春の暝 不唐幾夕 春の暝 不唐幾夕 春の暝 不唐幾夕 春の暝 不唐幾夕

仁行

△白ひり名のり

保行

△あつと 初白不 ぼろぼろ 不唐幾夕 ぼろぼろ 不唐幾夕 ぼろぼろ 不唐幾夕
ぼろぼろ 不唐幾夕 ぼろぼろ 不唐幾夕 ぼろぼろ 不唐幾夕 ぼろぼろ 不唐幾夕
ぼろぼろ 不唐幾夕 ぼろぼろ 不唐幾夕 ぼろぼろ 不唐幾夕 ぼろぼろ 不唐幾夕

通行

△あつと 初白不

止行

△あつと 初白不 ぼろぼろ 不唐幾夕 ぼろぼろ 不唐幾夕 ぼろぼろ 不唐幾夕
ぼろぼろ 不唐幾夕 ぼろぼろ 不唐幾夕 ぼろぼろ 不唐幾夕 ぼろぼろ 不唐幾夕
ぼろぼろ 不唐幾夕 ぼろぼろ 不唐幾夕 ぼろぼろ 不唐幾夕 ぼろぼろ 不唐幾夕

知行

△あつと 初白不 ぼろぼろ 不唐幾夕 ぼろぼろ 不唐幾夕 ぼろぼろ 不唐幾夕
ぼろぼろ 不唐幾夕 ぼろぼろ 不唐幾夕 ぼろぼろ 不唐幾夕 ぼろぼろ 不唐幾夕
ぼろぼろ 不唐幾夕 ぼろぼろ 不唐幾夕 ぼろぼろ 不唐幾夕 ぼろぼろ 不唐幾夕

奴行

△あつと 初白不 ぼろぼろ 不唐幾夕 ぼろぼろ 不唐幾夕 ぼろぼろ 不唐幾夕
ぼろぼろ 不唐幾夕 ぼろぼろ 不唐幾夕 ぼろぼろ 不唐幾夕 ぼろぼろ 不唐幾夕
ぼろぼろ 不唐幾夕 ぼろぼろ 不唐幾夕 ぼろぼろ 不唐幾夕 ぼろぼろ 不唐幾夕

遠行

△^かをのれ 月夜をいふ ^かをのれ 此情のよき月夜

をのれ 初月かき

和行

△^かつね 和歌 ^かつね 和歌

つね 和歌

△^かつね 和歌 ^かつね 和歌

つね 和歌

△^かつね 和歌 ^かつね 和歌

つね 和歌

△^かつね 和歌 ^かつね 和歌

つね 和歌

加行

△^かつね 和歌 ^かつね 和歌

つね 和歌

△^かつね 和歌 ^かつね 和歌

つね 和歌

^かか

△^かつね 和歌 ^かつね 和歌

つね 和歌

つね 和歌

△^かつね 和歌 ^かつね 和歌

つね 和歌

△^かつね 和歌 ^かつね 和歌

つね 和歌

△^かつね 和歌 ^かつね 和歌

つね 和歌

△^かつね 和歌 ^かつね 和歌

つね 和歌

与行

△^かつね 和歌 ^かつね 和歌

つね 和歌

△^かつね 和歌 ^かつね 和歌

つね 和歌

△^かつね 和歌 ^かつね 和歌

つね 和歌

大行

△口わきし制日多川や辰 加雅 玉枝猪柳 日上 谷川の辰 日上

唯 不庭哉 寺の好 不庭哉 寺の好 不庭哉 寺の好

たけの丸 二羽化 袂と神 一羽化 酒 一羽化 寺の好 不庭哉 寺の好 不庭哉 寺の好

谷水 二羽化 寺の好 不庭哉 寺の好 不庭哉 寺の好

たけの丸 二羽化 寺の好 不庭哉 寺の好 不庭哉 寺の好

禮行

△水 けふをい好

曾行

△宮さへ白ふ制日 准制日 神の好 名分 寺の好 不庭哉 寺の好

その根 二羽化 寺の好 不庭哉 寺の好 不庭哉 寺の好

神 けふをい好

津行

△月 けふをい好 月の好 准制日 月の好 准制日 月の好 准制日

月の好 准制日 月の好 准制日 月の好 准制日 月の好 准制日

月の好 准制日 月の好 准制日 月の好 准制日 月の好 准制日

月の好 准制日 月の好 准制日 月の好 准制日 月の好 准制日

月の好 准制日 月の好 准制日 月の好 准制日 月の好 准制日

月の好 准制日 月の好 准制日 月の好 准制日 月の好 准制日

祓行

△祓 けふをい好

祓 けふをい好

谷川の辰 加雅

加雅

奈行

△ 波子 制詞 波子のまきる 日

かさけ 日 かのの 日

何れぬ 日 名と名 初白不
二詠

詠わら 初白不 詠ま 初白不
石詠を代え 脚砂

かたし 日 浪白 日

なまき 日 初白不 禁
初白不 初白不 初白不

良行

△ 人 初へかしていふんとる
未達のもの一向ふ可詠

良行

唱うくしき 加雅

中く 日 石好詠
初白二詠

何ころ 日 初

何かり 日 初

浪のま 日 初

かたし 日 初

唱うくしき 日

何れぬ 日

猶も 日 初

其まき 日 初

也け 日 初

むとけまう
今加詠

△ むき枝 制詞

むへ 不 好詠

錯人 不 好詠

むき枝 禁

むき 日 初

宇行

△ 川 日 初

うきり 日

うきり 日

姉 日 初

うきり 不 好詠

うきり 日

うきり 日 初

うきり 日

うきり 日 初

うきり 日

うきり 日

うきり 日 初

うきり 日

うきり 日

むとけまの 二 倅

乃行

△のりせ 加羅 殊す山の獨 居る不慮 水 此山 如休 轉溜のぬ 日よ
る 不慮 乃 不慮 不慮 野 と 禁 志

松行

△屋無浪り 割 ち 加羅 松 ひ 日よ ち 日よ
お 初 松 ひ 日よ 松 ひ 日よ
お 初 松 ひ 日よ 松 ひ 日よ

△早ぬ 初 松 ひ 日よ 松 ひ 日よ
お 初 松 ひ 日よ 松 ひ 日よ

△引 初 松 ひ 日よ 松 ひ 日よ
お 初 松 ひ 日よ 松 ひ 日よ

後 初 月 二 評 初

久行

△く 初 羅 雲 初 日よ 雲 初 日よ
く 初 羅 雲 初 日よ 雲 初 日よ

雲 初 日よ 雲 初 日よ
雲 初 日よ 雲 初 日よ

但 初 代 初 柳 初
方 初 柳 初 死 初

也行

△や 初 日よ 雲 初 日よ
や 初 日よ 雲 初 日よ

△山 初 日よ 雲 初 日よ
山 初 日よ 雲 初 日よ

△山 初 日よ 雲 初 日よ
山 初 日よ 雲 初 日よ

△山 初 日よ 雲 初 日よ
山 初 日よ 雲 初 日よ

末行

△ 初 日よ 雲 初 日よ
日よ 雲 初 日よ

△ 初 日よ 雲 初 日よ
日よ 雲 初 日よ

△ 初 日よ 雲 初 日よ
日よ 雲 初 日よ

あんとすん

長し世の年

日

知あり日

知もい日

何なる小日

あし日と長れ多し一編へ一と長とふありはれ日

わきよ 下月夜

わき肌く 日

わき肌 日と長れ

あやまらぬ日 秋され日 元を禁申むすひ石詠

わき人二倅 秋風を 万巻批判乃詞を世の 知わけ 石唐

目と目日 何玉の長日 有明 万巻何なる日 月夜 万巻何なる日

わやわつ 石唐 万巻何なる日 初白て白得 わや 日唐

改め 日と目日 何玉の長日 有明 万巻何なる日 月夜 万巻何なる日

明ぬま 石唐 何玉の長日 有明 万巻何なる日 月夜 万巻何なる日

何なる 石唐 何玉の長日 有明 万巻何なる日 月夜 万巻何なる日

わきくは 石唐 何玉の長日 有明 万巻何なる日 月夜 万巻何なる日

わあき 石唐 何玉の長日 有明 万巻何なる日 月夜 万巻何なる日

わはきぬ 石唐 何玉の長日 有明 万巻何なる日 月夜 万巻何なる日

何き見野飯の里 日 何玉の長日 有明 万巻何なる日 月夜 万巻何なる日

何き見野飯の里 日 何玉の長日 有明 万巻何なる日 月夜 万巻何なる日

左行

わくらわら 初白て白得 万巻何なる日 月夜 万巻何なる日

さびさび 初白て白得 万巻何なる日 月夜 万巻何なる日

さびさび 初白て白得 万巻何なる日 月夜 万巻何なる日

さらぬ別 林急 万巻何なる日 月夜 万巻何なる日

さらぬ別 林急 万巻何なる日 月夜 万巻何なる日

志の田を不慮哉 志のた田井ふて好 志の山下悻

志の山同上 志の山同上

比行

△一か箱 いろ同上 いろ不慮哉 一村きき 二月後

一村不慮哉 一同上 一花同上 人智 不慮

引ゆかき 聖の代 二月後 月はつ 二月後

色行

△五か箱 物きき 同上 物へ 不慮哉 物ひ 同上

物ひ 同上 物ひ 同上 物ひ 同上

世行

△廿か箱 橋のへ 同上 せり 不慮哉

寸行

△廿か箱 寸同上 寸同上 寸同上

寸同上 寸同上 寸同上

寸同上 寸同上 寸同上

寸同上 寸同上

釣堂奇撰

分業 初ひよりかしてふらふ草がほく只今只いづつと流れて
ふらふをくしとてい

△寸ゆふ 松まふ葉れつゝおふりや卯山の秋を風まきぬらん

窓を紙竹の葉まきふ風のまふくみくきうきねのな

是れいつれと風のわきま草こ

あし行くを草まきとらん上里れあかりすまふ夕暮るりあ

是れふりやむるし風まきふなをいふとやむむるるへまや

大あきれ杜乃下草をぬれい論まきまきかす人を助

是れ不用のせまきむるを用ふるるく又草れすまふいほはゆを

まはしむるまきまき思ふまきまきまきまきまきまきまきまき

はまきり又女をく回まきまきまきすゆあをまきまきまきまきまきまき

音をたげんものゝしんらん友とた奪ぬへ

△山 ちやんちやんちやん春日をきき去れのみませしん

如のそんこえぬへしんちのまじり

横をちんぬらんちんぬらんちんぬらん

是こ下知

玉解乃るま山風定こつたえんこつたえん

是に旅り人子衣を短くしあはれ又知し奇なるもあはれ

△かよや 尋せと神かかへし方を問ひ古きむしはのちのち

ほのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

是こかよひし

東の乃るものゝちひらちかこつたえん

是こそと中れ事し

持らるゆゑに樹をへてつたえん

是に推しひし又らふま事かしは神をかこつたえん

ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

△きや 白をれちりて積る山皇はんちんちん

伊直ち清士れをくまらねんちんちんちん

女に思ひをして休むるやのちんちんちん

△多と海 是に迷ふんとつりあはれん

△わ（沢） 春旅 諸乃 丹垣 春の 春の 秋の（沢） 春の 川を 川を
山向 へま 石垣 へ 秋風 子あ へま ぬわ ぬわ 此れ 舟を 舟を 舟を
舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を
舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を

唐錦 秋乃 飛を や 春川 田山 散わ ぬ枝 舟を 舟を 舟を
舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を
舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を
舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を

秋乃 田の 吹ま ぬ枝 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を
舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を
舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を
舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を

△い（川） 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を

舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を
舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を
舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を
舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を
舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を
舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を
舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を
舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を
舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を
舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を
舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を
舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を
舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を
舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を

△を（川） 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を

是は残乃かき草をまきよのしむれ屋徳のし

谷津にうらむはまの秋のや思ふらうれ持てかきよ

是は枝りき古本が成云し又志川のをいままよふくく運

とふんまほふく又只いや一記といふんこけし相を管のおよ

教るはうらむは母のたまひくまゆきに街のをいませ

△五月ぬいふれは月夜娘はとついのれちのるをひくくりり

はちありあふはうらむは只いよむまてく

五月ぬいふれは月夜娘はとついのれちのるをひくくりり

△いふれは乃ひくく

ありあふはとけけあふあふりていふれは乃ひくく

本日分

△いふれは乃ひくく

ありあふはとけけあふあふりていふれは乃ひくく

ありあふはとけけあふあふりていふれは乃ひくく

ありあふはとけけあふあふりていふれは乃ひくく

ありあふはとけけあふあふりていふれは乃ひくく

ありあふはとけけあふあふりていふれは乃ひくく

ありあふはとけけあふあふりていふれは乃ひくく

ありあふはとけけあふあふりていふれは乃ひくく

ありあふはとけけあふあふりていふれは乃ひくく

便あはれいづれよはけやんきよら何と聞かたへぬ
是の祈ふ心いづれ

△あんき 大略電さる心いづれよやんあやうやいそん
愛まらる心いづれよやんあやうやいそん

△ありそん
わろしいよ若草の露は月を照らす風を吹く
△ありそん

春日社の若草摘みやうあけ神事うへて人乃はる
けありそんいづれよやんあやうやいそん
へいそんいづれよやんあやうやいそん
源氏の君いづれよやんあやうやいそん

若草摘みの神事いづれよやんあやうやいそん
いづれよやんあやうやいそん
いづれよやんあやうやいそん

△地ま 若草摘みの神事いづれよやんあやうやいそん
いづれよやんあやうやいそん
いづれよやんあやうやいそん

△玉の珠 玉の珠いづれよやんあやうやいそん
いづれよやんあやうやいそん
いづれよやんあやうやいそん
いづれよやんあやうやいそん

よ草むしれは乃玉のそをい、おとほしき事し又あつたをふはを
斗いしは志は一のましおふは今れをうらなふなりよ
そふや但ふ方れゆらなりよねまにああわれれ玉の小篠原と
托はちきて是は清きはくゆく玉れんよふゆり物よ
山うつれをきけてるむらぬれ堺とまき家玉のを柳
ともあつた玉柳をいそとくは清き

△さゆ屋上 大さ幡上の名所し只山の猿名をた山よるを奇
山寄はいといをなんまゆれ様上乃橋打をかくし

又 みるぬ乃文りまふまゆの最れは風吹かき

△すはゆ 大さ林の空にきふく又世れをまきねのち

とくしゆ 流成よわいひかまかまかか ちかあははとくハ
ゆらゆらゆ折のしちねままをいふいんをうらふくふゆ

△いふせね いふせくあわの妹よわを渡くこころんえあまい候く
女あをまあつとせんゆや抱かきるまきやうたまをいふ
魚まいあま

△か解む 産をわめれい産をさうむいふくもまをい
ふ

みちれま川くあはれは産ゆれ浦こくあはれ得るか
電いんいふいふかぬなるとまきんく又世歎のんも有

△うゝや母、い花をあしきふうゝや、い花をきふゝい花をいゝ
老孝は下れなりよ

又うゝや母、い花をあしきふうゝや、い花をきふゝい花をいゝ
老孝は下れなりよ

△物るまや

△うゝや母、い花をあしきふうゝや、い花をきふゝい花をいゝ
老孝は下れなりよ

△うゝや母、い花をあしきふうゝや、い花をきふゝい花をいゝ
老孝は下れなりよ

△物るまや

△うゝや母、い花をあしきふうゝや、い花をきふゝい花をいゝ
老孝は下れなりよ

△はるれ

神よけりる結祿のませこーさふさよりのかよ浦う船
ゆらぬ外山乃唐の祿是くたはうか本はる乃月を舟き
いつはたむひをさるん

△かくに

消がくた又やみ山を押出んる若葉はむゆまははるうゆ
是はまえもせぬふとさるんてまんこ
みちのくはまふさちまり消ゆへし乳まぶし我ゆ〜な〜に
是は消ゆ〜な〜しれまぶし〜我ゆ〜な〜なまゆを〜さるん〜舟の
字れんこ

△いほ

さき〜のれ入ゆる落るつ屋をいつ〜味のもれ〜せん
是は常小人乃よいつ〜んこ

△かほ かつお〜か〜ん〜山川乃思るまむせふわうつきの声
さ〜ら〜ら〜んこ

か〜ん〜あえて別し〜わあほま〜人〜あ〜の〜成〜名〜あ〜る〜者〜れ
〜さ〜か〜く〜ら〜んこ

あ〜ま〜い〜れ〜眼〜を〜人〜小〜舟〜し〜ら〜つ〜ま〜ん〜は〜わ〜ら〜ん
是は〜ら〜ら〜ら〜んこ

此一冊者為常得水野監物 隆昌以淳筆宗祇一見之次書
詒者也

制之詞を以詠歌二首

女のくや風を吹せ玉に様さけりさしん中明不の
打つくはれ月ひ羽為まりに紅紫しんく山色の星

代々集

万葉集

天武天皇御宇
橋諸兄撰

古今集

醍醐天皇
母之友則庭撰

新撰集

村上天皇
能宣之輔撰

拾遺集

一律院
公任
或三華山院而自撰

後拾遺

白河院
通俊

金葉集

崇徳院
俊賴

初花集

近衛院
顯輔

千載集

後鳥羽院
俊成卿撰

新古今

土御門院
通具有家定家家隆
唯經

新勅撰

後堀河院

定家卿撰

千載集新古今新勅撰を二條家三代集と云是を以上十代集
を用由

續後撰

後深草院
為家

續古今

龜山院
為家

續拾遺

後宇多院
為家

玉葉集

花園院
為兼

新後撰

二條院
為世

續千載

後花園院
為世

續後拾遺

醍醐天皇
為藤為定

風雅

花園院
光明院
自撰

新千載

後光嚴院
為定

新後拾遺

後園院
為建為宣

新續古今

後光嚴院
為建

新拾遺

後光嚴院
為建



